

沼津市

明治史料館通信

2006.1.25 (季刊 年4回発行) Vol. 21 No. 4 通巻第84号

「義勇奉公之碑」(あしたかコミュニティ広場)



ぬまつ近代史点描 ⑥4

愛鷹地区の戦争記念碑

「戦役記念」義勇奉公之碑

旧愛鷹小学校校庭（現あしたかコミュニティ広場）に建つ。大正六年（一九一七）一〇月建立。題号の揮毫は安正（福島安正・日露戦争で大本営参謀。大正三年九月、大将に昇進。大正八年没。碑裏面には、最上部に日露戦争における戦病死者5名の所属、階級、氏名が刻され、その下に明治二十七八年戦役（日清戦争）出征者21名、明治三十七八年戦役（日露戦争）出征者64名、大正三四年戦役（第一次世界大戦）出征者36名の氏名が刻されている。巨大な自然石を台座としており、その裏面には石板がはめ込まれている。石板下部は埋没しているが、発起者として帝国在郷軍人会鷹根分会の設立時分会長・企工時分会長・顧問の3名のほか、建設委員として24名、第一班から第六班までの181名、特別賛助員31名の氏名が、また普通賛助員として愛鷹地区6地区の賛

助額と人数（東稚路20円36名・西稚路10円5銭7名・東原23円40銭31名・鳥谷21円22名・柳澤14円30銭27名・青野48円60銭84名）が刻されている。

鷹根尋常小学校では、明治二四年（一八九二）教育勅語が、翌年御真影が下賜され、同三四年（一九〇一）に学校内に奉安所が設置された。昭和四年（一九二九）に火災に遭ったが、「直子ニ駆ケ付ケ、尊影ヲ第一奉遷所ニ遷シ奉リ」とあり、御真影の焼失は免れた。この火災によって箱根離宮が移築された。校舎として使用されたのだが、この移築に際して、奉安殿は校地の最北端に移転され、義勇奉公之碑と奉安殿が並んで建つこととなった。戦後、昭和二年（一九四六）七月にGHQから撤去命令が出され、奉安殿は撤去されたが、碑はそのまま残され、現在に至る。

忠霊塔

東稚路字久保の不動堂裏の共同墓地の最奥に建つ。昭和三年（一九五六）一〇月建立。裏面に9名の戒名、所属、階級、氏名、没年月日、没地が刻されている。



忠霊塔

碑前には、狛犬一对、「岳泉同志会」贈の花立一对、石灯笼一对等があり、慰霊空間を形成している。一般の忠魂碑と異なり、戦没者だけでなく、空襲によって亡くなった者も刻されており、また、満蒙开拓青少年義勇軍で満州に渡って亡くなった者も祀られていることも注目される。

「忠魂」護国碑

東原の大喜寺に建つ。昭和二八年（一九五三）九月、東原区民一同によって建立された。揮毫は南山僧正慈園。碑裏面に、17名の戒名・軍別・階級・氏名・戦没年月日・戦没地が刻されている。台座



「忠魂」護国碑

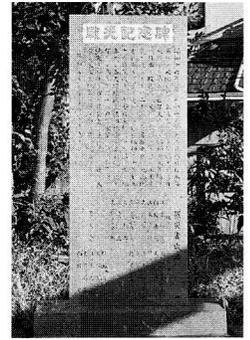
裏に、寄附者氏名、建設委員氏名が刻された銅板がある。碑前には、「献華」と刻された花立一对と「献燈」と刻された石灯笼一对がある。花立にはそれぞれに「東原男女青年団」「東原婦人会」と刻され、石灯笼にはそれぞれに「東原消防団」「生還者一同」と刻されている。

護国碑

柳沢の桃沢神社・浅間神社境内に、昭和二年（一九五四）八月一〇日、柳沢区民によって建立された。題号の揮毫は慈園。碑裏面には、「日支事変及び大東亜戦の戦没者」として陸軍21名、陸軍航空兵1名、海軍1名、开拓団2名、警察官2名、計27名の兵科・氏名・年月日・場所が刻されている。台座裏には、寄附者82名、転出生還者10名のほか、生還者53名、元軍友会28名、建設委員16名が刻された石板がある。



護国碑



戦災記念碑

戦災記念碑

東椎路字久保の不動堂に昭和五年（一九四四）建立。昭和二〇年（一九四五）七月一七日未明の「沼津大空襲」は、沼津の市街地を中心に焼夷弾攻撃を受けたものだったが、当時沼津市ではなかった東椎路の久保地区も、隣の西沢田地区に海軍が設置した高角砲陣地があったためか攻撃され、焼夷弾によって18軒の家が焼かれた。このことを記念するために建立された。碑下部に13名の罹災者氏名が刻されている。

尚、東椎路には昭和一九年（一九四四）一月三〇日にも焼夷弾が落とされている。これは、沼津市域で最も早い焼夷弾投下であった。

征独記念（手水鉢）

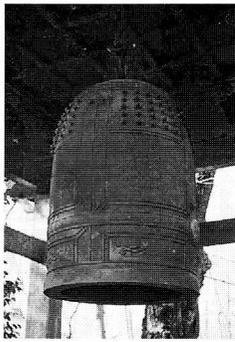
東椎路字小屋敷の龍雲寺観音堂に、大正一一年（一九二二）三月



征独記念（手水鉢）

に奉納された。大正三、四年（一九一四〜一五）の第一次世界大戦に出征した記念として、出征者4名の氏名が刻されている。

東椎路字小屋敷の龍雲寺観音堂にある。梵鐘に刻まれた銘文によれば、元の鐘は元禄年間に江戸・浅草の人が寄進したものだ。昭和一七年（一九四二）三月、大東亜戦に供出されたという。昭和二五年（一九五四）龍雲寺の壇信徒一同により再鋳された。



梵鐘

シリーズ
沼津兵学校とその人材



福井藩から来た留学生 津田東

福井藩からは一五名ほどの藩士が沼津兵学校に留学したことが知られている。うち六名が資業生に及第し、西周が沼津を離れた後は、同じく六名がその後を追ひ、西が東京で開いた私塾育英舎に入塾した。どちらの六名にも入った人物として津田東（ついで）という青年がいた。

福井出立は明治二年（一八六九）一月五日、沼津に着いたのは同月十五日（一八日とも）だった。その時、年齢は二〇歳。藩費による留学であり、永見裕の引率のもと、他の数名といっしょだった。宿所は沼津宿本町の米屋藤十郎方に定めた。

彼の経歴については、これまでほとんど紹介されることがないので、ここで紹介したい。

兵学校附属小学校へ通い資業生になるべく受験準備にあたり、三年（一八七〇）九月二四日には他の三人とともに第六期資業生に及第した。福井藩からは学業勉勵につき二〇両を下賜されている。

津田は旧名を捨五郎といい、一、二一石余を食んだ福井藩士津田達太郎の子である。兄の津田拒（達太郎）は二三〇石取りになっていた

しかし、残念なことに、三日前



津田 東

晩年の明治20年代後半から30年代にかけて撮影されたものか。

(津田京子氏・佐竹伸子氏・田中直子氏 協力・提供)

の九月二一日、西周は新政府の求めに応じ、沼津兵学校を辞し上京していた。そこで福井藩留學生は、翌四年三月第七期資業生に合格した杉田悦三郎のように沼津に残留する者と、西を慕いすぐに上京する者とに分かれることとなった。

津田は、閏一〇月二五日、永見ら五名とともに沼津を去り、一月六日（閏一〇月二六日とも）には東京浅草の育英舎に入塾した。

資業生としての沼津での勉強は極めて短期に終わったが、西のもとでの学習は東京で続けられた。育英舎の塾頭になった佐々木慎思郎（沼津兵学校第一期資業生）や、津和野から来た塾生山辺丈夫らとともに、明六社の客員になっており、西の下で大いに感化・啓発されたことがうかがえる。

六年（一八七三）五月、津田は沼津兵学校にとも留学した松原秀成とともに新潟学校に英語教師として赴任する。それ以前、津田が、「米百俵」のエピソードで有名な長岡藩の藩校の系譜を引く、長岡洋学校（明治五年一月開校）に在職していたとする文献もある。

新潟学校の同僚教師には、松原の他にも、やはり沼津兵学校に留学した元福井藩士松平正秀（八十二）がいた。松原は明治九年（一八七六）まで新潟に在職したが、津田については不明である。

その後、実業界に転じたらしく、明治二年（一八七九）八月開業の東京海上火災保険会社に書記方として加わった。取締役二橋元長が新潟学校の元校長だったという人脈によるものかもしれない。同年一〇月、郵便局御雇い外国人ブラウンとともに白峯造船所の船舶審査を実施したという新聞記事から、彼の仕事の一端がうかがえる。

一四年（一八八一）二月には、海事協会会長、編輯長の肩書で雑誌『海事新報』を創刊している。育英舎での同窓生山辺丈夫は、東洋紡績株式会社の初代社長となり、日本紡績業界の父といわれるようになるが、ロンドン留学中の山辺を、英語に堪能な工場経営者を求めている渋沢栄一に紹介したのは津田であった。

また、陸軍省に文官として勤めていた佐々木慎思郎が、後に東京

海上火災保険会社や第一銀行に入り重役となったのは、津田の人脈によったと推測される。

西周の日記には津田の名前がしばしば登場する。「津田東来ル」（明治一六年八月五日）、「津田東令夫人、児女を連れ来賀ス」（二〇年二月四日）、「津田東来り、第一銀行株三枚買フ、九百円ナリ」（五月三一日）、「津田東来」（二二年一月一日）、「升子、津田東妻女へ年礼ニ行ク」（同月二四日）、「津田東妻君酢（鮓）ヲ以テ尋来ル」（五月二四日）、「来客（中略）津田東」（二二年一月一日）、「津田東も来る、少々話して去、無音見舞いなり」（三月二〇日）、「山辺を停車場に迎（中略）津田東共、相寄つ午餐を供す」（二〇月一六日）、「山辺氏四人来り、午餐ヲ供す、其後、共に津田東君之招に応ず」（同月二八日）、「津田東、病氣平癒にて来訪す、暫し話して去る」（二三年六月二二日）、「といった具合である。家族ぐるみの親しい付き合いであったことがわかる。また、佐々木慎思郎とともに西家の資産管理・運用を任されていたようでもある。

津田東が亡くなったのは明治三二年（一八九九）一月一四日であった。東京谷中の寺院に眠る。

（参考文献）熊澤恵里子「福井藩にみる『文武学校』の展開過程」『地方教育史研究』第一九号、戸沢行夫『明六社の人びと』（一九九一年、築地書館）、『新潟県教育百年史 明治編』、『松原家代々勤書』（熊取正光氏所蔵）、『東京海上八十年史』（一九六四年）、『国際人事典 幕末・維新』（一九九一年、毎日コミユニケーションズ）、宮武外骨・西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』（一九八五年、みず書房）、川崎勝『西升子日記』、『南山経済研究』14―1・2、一九九九年）、同『西周日記』、『南山経済研究』14―3、17―1、二〇〇〇～二〇〇二年）（樋口雄彦）

沼津市明治史料館通信 第84号

編集 沼津市明治史料館
発行

〒410-0051 沼津市西熊堂三七二―一
電話 〇五五九二二三―三三三五
FAX 〇五五九二五三―三〇一八
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/sisetu/meiji/index.htm